

## 2. 閻魔大王と地蔵菩薩

「嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれる」子供を戒めるため引き合いに出されるほど、閻魔大王は誰もが知る存在だった。「村のはずれのお地蔵さんは いつもにこにこ見てござる」と童謡に唄われた地蔵菩薩も誰もが知っている。しかし、この両者が実は一心同体であることは案外知られていない。

### (1) 十王信仰

#### ① 十王と追善供養

十王は冥界にあって死者の罪業を裁判する 10 人の王である。人間は六道を輪廻し生死を繰り返すとされていたから、次の生が決まらない中有の亡者は必ず十王の裁きを受けなければならない。初七日から 7 日毎に 7 回裁判が行われる。これで 49 日が経過し、あとは百箇日、一周忌、三回忌に 3 度再審がされ、計 10 回の裁判となる。これら十王には本地仏があり、以下の表ようになる。

#### 【十王と本地仏】

忌日 (追善供養)	十王名	本地仏
しよなのか 初七日 (7 日目)	しんこうおう 秦広王	不動明王
ふたなのか 二七日 (14 日目)	しよこうおう 初江王	釈迦如来
みなのか 三七日 (21 日目)	そうていおう 宋帝王	文殊菩薩
よなのか 四七日 (28 日目)	ごかんおう 五官王	普賢菩薩
いつなのか 五七日 (35 日目)	閻魔大王	地蔵菩薩
むなのか 六七日 (42 日目)	へんじょうおう 変成王	弥勒菩薩
ななのか 七七日 (49 日目)	たいざんおう 太山王 (泰山王)	薬師如来
百箇日	びょうどうおう 平等王	観世音菩薩
一周忌	としおう 都市王	勢至菩薩
三回忌	ごどうてんりんおう 五道転輪王	阿弥陀如来



「十王巡り」を語る竹澤環江氏 (西光寺)

これに 7 回忌 (阿閼如来)、13 回忌 (大日如来)、33 回忌 (虚空蔵菩薩) を加えると十三仏となる。

閻魔大王は地獄の王といわれるが、同時に本地仏である地蔵菩薩の化身である。本地仏とはインドを本地とする諸仏が神として現れるという「本地垂迹説」による。日本に仏教が渡来し、奈良時代ごろから日本古来の神々と融合するようになる。これを神仏習合といい、仏や菩薩が本来の姿であり、神は仮の姿という意味の「権現」が使われるようになる。「明神」も同様の意味を持つ。御神体とされた鏡に仏像や梵字を線刻したものを鏡像または御正体というが、これが発達して懸仏となった。

十王信仰はインドにおける地獄の支配者閻魔王と、中国の泰山冥府信仰が習合して作られた。平安中期比叡山の高僧、恵心僧都源信が地獄・極楽を説いた『往生要集』から地獄絵が生まれ、室町時代末以降、熊野比丘尼や越中立山の衆徒などの絵解きにより広められた。

十王堂には十王像のほかに、三途の川を渡った亡者の衣を剥ぎ取る奪衣婆、剥ぎ取った衣を衣領樹の枝に掛けて罪の重さをはかる懸衣翁、閻魔庁の冥官で記録係の司録と罪状を読み上げる係の司命などの像が一式となっている。

忌日には遺族による追善供養がなされたが、これは亡者が生前の罪業によって裁かれる際、本人に代わり善を追加することをいう。遺族の追善供養により亡者の罪業は軽減され、地蔵菩薩の助けを借りて、やがて阿弥陀如来により極楽往生がかなうとされた。

## (2) 地蔵菩薩

### ① 庶民に親しまれた地蔵菩薩

天空を象徴する虚空蔵菩薩に対し、大地の恵みを神格化した菩薩が地蔵菩薩。末法思想が盛んだった平安中期以降、地蔵信仰が広まった。頭を丸めた僧形は観音菩薩像と比べて親しみやすさもある。六道輪廻ではそれぞれにあって導く六地蔵となり、江戸時代には延命、身代わり、とげ抜きなど、現世利益を与える存在となる。地蔵菩薩によだれかけや頭巾を奉納するのは賽の河原や水子供養など、亡くなった幼児救済に由縁している。

#### 【守屋貞治 (1765~1832) の地蔵菩薩】

高遠石工<sup>たかとういしく</sup>といえば全国にその名を知られた名匠であるが、中でも守屋貞治は高遠石工を代表し、石仏師といわれる。貞治は『石仏菩薩細工』に自ら造った336体の記録を遺している。熱心な仏教信者であった貞治は上諏訪の温泉寺住職、願王和尚から多大な影響を受けた。温泉寺は臨済宗妙心寺の末寺で、諏訪高島藩の二代藩主諏訪忠恒により慶安2年(1649)創建された。寺には忠恒以降歴代藩主の墓がある。若き貞治はこの寺で願王和尚に仕え、雲水<sup>うんすい</sup>として仏道修行に励んだと伝えられている。



延命地蔵菩薩  
慈福院(飯島町七久保)



きやらだせん  
依羅陀山地蔵菩薩  
法界寺(箕輪町木下)



延命地蔵尊  
神宮寺(松本市浅間)

### ② 賽の河原と地蔵菩薩

初七日が過ぎると亡者は三途の川を渡る。三途の川の河原を「賽の河原」という。ここは親に先立って亡くなった子供が親不孝の報いで苦を受ける場とされる。子供らは親の供養のために積み石の塔を築く。完成間近になると大鬼が現れて塔を破壊する。何度も繰り返すうち、やがて地蔵菩薩により救われる。「一重積んでは父のため、二重積んでは母のため、三重積んではふるさとの兄弟我が身と回向して・・・」哀感こめて唱える「賽の河原地蔵和讃」。大鬼は子らに「親の歎きは<sup>なげ</sup>娘<sup>なんじ</sup>らが苦言を受くる種となる」と、追善供養なく悲しみに暮れている親を戒めている。子を失った親の何ともしがたい悲しみを、少しでも軽くするための先人の知恵と理解できよう。

#### 【清泰寺(松川町上片桐)の十王堂と地蔵堂】

伊那街道片桐宿のはずれにある清泰寺は江戸時代後期に臨済宗から浄土宗に改宗した経歴を持つ。そのきっかけは文化13年(1816)念仏行者徳本の信濃巡錫<sup>しんねいじゆんしゃく</sup>だった。それから20年後の天保7年(1836)に小石川一行院(徳本終焉の寺)の末寺となっている。

清泰寺には伊那谷最大の木像仏という閻魔大王を安置する十王堂がある。堂内には十王像のほかに罪の重さを量る



清泰寺閻魔堂



罪状秤<sup>ざいじょうばかり</sup>、生前の善悪の所業を映す浄玻璃の鏡<sup>じょうはり</sup>、赤い顔の男は悪を見通し、白い顔の女は善を見通す人頭杖<sup>にんずじょう</sup>など、裁判に必要な道具類もそろっている。

同寺境内には地藏堂もある。堂内は賽の河原を表し、地藏菩薩の周りに裸の子供が群がっている。奥に大鬼も控えている。閻魔大王の本地仏は地藏菩薩。地獄に落とすのが閻魔なら、それを救うのが地藏菩薩である。一心同体であることから、両者ともなって安置されることも多いが、これほど立派な閻魔堂と地藏堂が対を成すのは希少である。



清泰寺閻魔堂

### 【松本城下町の出入り口に十王堂】

文禄年間（1592～96）石川数正が松本城築城とともに、城下四方の出入り口へ城郭の鎮守として十王堂を配置したといわれる。

明治の廃仏毀釈でそのほとんどが跡地となる中、東の十王堂は廃堂となったが唯一十王像



閻魔大王とその他十王像  
放光庵（松本市餌差町）



金に着色された石造地藏菩薩立像

が維持され、昭和 11 年（1936）再興。閻魔堂に隣接して放光庵があったが、近年、放光庵が新築され、こちらに十王像が安置されている。閻魔大王他諸像の市重要文化財指定に加え、「石造地藏菩薩立像」が平成 28 年 3 月市文化財に追加指定された。地藏菩薩立像は寛文 9 年（1669）に地元山辺の石で造立されたことが判明しており、松本の石造彫刻史を解明する上で貴重な史料といわれている。

## （3）地獄と極楽と善光寺

### ① 落語「おけちみやく」

江戸時代、善光寺では浄財を収めると「お血脈」という判子（御印文）<sup>ごいんもん</sup>を額に押しもらえ、過去の罪業によらず誰でも極楽往生できたという。そこで猫も杓子も善光寺へお参りして、お血脈を押しもらうようになった。

地獄では、めっきり落ちてくる亡者が減り、閑古鳥が鳴いていた。

困り果てた閻魔大王が事情を探らせてみると、善光寺で「お血脈」が大流行していることが判明。そこで鬼たちを集めて会議を開き、善後策を練ることに。そんな折、「見る目嗅ぐ鼻」という鬼が「善光寺のお血脈を盗み出しては」とご注進。閻魔大王は、さっそく地獄にいる大泥棒たちの中から釜風呂につかっていた石川五右衛門を呼び出し、善光寺からお血脈を盗み出すように命じた。

さすがは石川五右衛門、善光寺の宝物殿に忍び込むと、まんまとお血脈を盗み出した。ところが、そのまま地獄へ戻るかと思いきや、お血脈を手にとると自分の額に押し当て「ありがたや、かたじけなし〜」と大見えを切って、スーッと極楽へ昇天してしまったとき。

<『善光寺御開帳公式ハンドブック』（善光寺御開帳奉賛会・信濃毎日新聞社 2008 年 11 月発行）より>

落語「お血脈」は当時の庶民が抱く善光寺信仰をよく表している。ただ、ここでは「お血脈」と「御印文」が混同されている。